

令和6年度自己評価表

中長期目標	地域資源を活かした探究的な学びや部活動の振興をとおして、個性の伸長を図るとともに、協働する力や粘り強く物事に取り組む力を育み、価値観の多様化する時代を生き抜くことのできる、豊かな人間性を備えた人材の育成を目指します。	今年度の重点目標	「BIG」に育て境高生 1【B】部活動による人間力の伸長（部活動を通して、協働の力、たゆまぬ努力を続けられる力など幅広い人間力を伸長します。） 2【I】生きる力（探究力）の育成（探究的活動を通して、課題発見能力や課題解決能力や表現力など深い生きる力（探究力）を育成します。） 3【G】学力の向上と進路実現（普通教科と専門教科および学校設定科目を通して、進路実現を可能にする確かな学力を育成します。） 4 学校業務改善の取組を進め、学習指導をはじめとする生徒に対する指導の充実を図る。
-------	--	----------	--

年 度 当 初				中間評価			
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
1 部活動による人間力の伸長	○「部活動に入ってしっかり頑張った」と回答する生徒の割合が8割を超えること。 ○全国大会出場者が80名、入賞者が5名を超えること。 ○中国大会出場者が200名を超えること。	○全国大会出場者55名（入賞者2名）、中国大会出場者数183名（近畿大会含む）。 ○部活動加入率は80%を超え、生徒は積極的に活動に取り組んでいる。 ○学習と部活動の両立は、困難を感じるが、根気強く指導を続けている。 ●アンケート「部活動に入ってしっかり頑張った」肯定的回答83.3%	○文武両道に励み、地域の誇りとなる普通科高校として存在 ○県トップレベルの実績を持つ部活動を維持育成し、学校内外に活力ある境高を発信 ○部活動を通して、協働の力、努力する力など人間力の育成	○活気ある学校づくりのために、今後も部活動の充実を努めていく。 ○部活動を通して、協働することの大切さや努力を続けることの大切さを常に発信する。 ○部活動と学習との両立に向けて効率よく練習に取り組むよう引き続き働きかける。 ○部活動を大切にできている生徒が多いので、学力の伸長を伴うよう、引き続き担任・教科担任・顧問の間で連携を取るよう心がける。	○部活動加入率は80%を超え熱心に活動している。 ○ハンドボール部男女、陸上競技部、ヨット部、弓道部、写真部が全国大会に出場した。また、バドミントン部男女、硬式テニス部男子、書道部が中国大会に出場した。 ○多くの部活動が好成績を残したことは嬉しい限りである。 ○9月以降実施予定のスクールプロジェクトには小学生約20名が申し込みしている。 ○2年次生は、学習や部活動等において意識が変わり始めてきていると感じる。	B	○2年次生が中心となる時期を迎えるので、各ホームルームや学年集会を通して学校の中心としての自覚や意識付けを行う。 ○継続して声かけをし、より高いレベルを目指す指導を行う。部活動に加入していない生徒にも、様々な活動に挑戦するよう目標を持たせる。 ○部活動と学習との両立に向けて効率よく練習に取り組むよう引き続き働きかける。
	○「ボランティア活動に主体的に取り組んだ」と回答する生徒の割合が5割を超えること。	○ボランティア参加者は延べ116名であった。（トライアスロン・保育園・高齢者施設など） ○ボランティアの経験を進学試験で生かしている生徒もいる。 ○スクールプロジェクトを通じて地域の小学生と学習やスポーツの交流を行うことができた。	○地域のボランティア活動への積極的な参加 ○部活動において地域の人材の力を借りたり、生徒が小中学生に学習やスポーツを指導したりすることで地域の信頼を獲得	○ボランティア活動や地域の活動への参加は「社会認識を高める」という視点からも重要である。 体験効果を高めるための講座なども設定したい。	○8月末までのボランティア申し込み者数は延べ87名であった。 ○学校周辺清掃には、100名に及ぶボランティア参加者を得た。		○ボランティア活動や地域の活動への参加が「社会認識を高める」という視点からも重要であるということを再度説明する。
2 生きる力（探究力）の育成	○「自分や他人を大切にすることができた」と回答する生徒の割合が9割を超えること。 ○「生徒は自分や他人を大切にすることができるようになった」と回答する教員の割合が9割を超えること。 ○「探究学習等に主体的に取り組むことができた」と回答する生徒の割合が9割を超えること。	○QUを用いて生徒の抱える問題の早期発見に努め、学級の実態を把握し相談活動から得た生徒の情報を教職員間で共有している。また、学期1回の生徒情報交換会を行うことで組織的な対応に繋げて問題解決にあたった。 ○生徒間のトラブルについては、関係する分掌間で生徒情報を共有し、問題事案に対して組織的に対応した。 ○他者を想像し、気遣いや思いやりを持てるよう、妊婦体験、社会人講師による手話の学習、高齢者疑似体験等様々な体験の機会を設けた。 ○1年次生は、ソーシャルスキルトレーニングを人権学習に取り入れた。 ○元気に学校生活に取り組んでいる生徒が多いが、友人関係や人間関係で悩む生徒が増加している。 ○「境考学」では1年次生は、SDGsセミナーを開催し、23団体46名の方からSDGsの取り組みを学ぶことができた。2年次生は、フィールドワークを実施し、地域に出かけてイベントに参加をしたり、地域の方と一緒に活動をする機会を持つことができているグループもあった。 ○1月に「境考学」成果発表会を開催し、40名の地域の方が参観され、関心も高く、認知されてきたと思う。課題設定・探究内容の深まり、根拠の精度や表現方法は、まだ不十分である。 ○探究活動の継続や時間数の確保が難しい面があった。 ●アンケート「自分や他人を大切にしている」肯定的回答98.0% ●職員アンケート「生徒は自分や他人を大切にすることができるようになった」肯定的回答82.8% ●アンケート「探究学習等に主体的に取り組むことができた」肯定的回答90.5%	○生徒一人ひとりの状況を全教職員が把握できているという生徒理解の意識の高い職場 ○人権教育全体計画に基づいた規範意識・人権意識の高揚 ○「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」を養うため、境考学を充実・発展 ○境考学を進める上で、地域の方々と連携し、地域の課題を見つけ、その解決に努める	○引き続き、分掌間の連携と管理職の援助により生徒情報を共有し、問題事案に対して組織的に対応する。 ○引き続き、生徒の行動、発言、様子を見守り、状況に応じた適切な指導を行う。 ○他者を思いやる体験活動の感想を授業で話し合うなど、授業の方法を工夫し、他者の意見を知る機会を設ける。 ○「境考学」を契機に、主体的に地域のイベント等に参加する生徒はまだ少ないが、今後も情報提供に努めるとともに、各グループの問題課題に適したイベントや外部団体の紹介や連携のノウハウを、コーディネーターと連携しながら、適宜広報し、支援していく。 ○探究的な学習の意義や指導方法・評価について、職員研修を実施し、教職員の意識と指導力の向上を図る。 ○「境考学」は、本年度で6年目の取組であり、学校全体としてその意義を確認し、今後も継続して取り組んでいく。そのためにも、時間確保をすることが必要である。 ○「境考学」において、インターネットを中心とした情報収集から、地域の方々との連携による情報収集にシフトし、コミュニケーションから課題を見つけ解決策を考察するよう指導する。	○QUと生活アンケートを用いて生徒の抱える問題の早期発見に努め、学級の実態を把握している。日頃行っている相談活動から得た内容や気になる生徒の情報を教職員間で共有している。また、学期1回の生徒情報交換会を行うことで組織的な対応に繋げて問題解決にあたっている。 ○4月に2年次生を対象に、境港市役所職員による境港市の課題についてのプレゼンテーションを実施し、課題の共有を図った。 ○中間発表の際、島根大学より講師を招き、今後の取り組みに対しての指導・アドバイスを受けた。 ○9月にSDGsセミナー（1年次生）を開催し、18社36名の方からSDGsの取り組みを学ぶことが出来た。	B	○引き続き生徒の様子を見守り、声掛けを行っていく。 ○1年次生対象の自己理解他者理解の講演会を1月15日に行うので、それを通じて互いを尊重し合える心を養う。 ○外部機関との連携を深め、アウトプットの機会を設けるために、ふるさとフォーラムIN米子や境港市高校生議会への参加を予定している。
	○「挨拶・服装等けじめのある学校生活ができた」と回答する生徒の割合が8割を超えること。 ○ゴミの分別・減量化について、平成28年度との比較で継続して減量を実現すること。	○延べ83人の生徒が生徒会執行部に入学して、精力的に活動している。 ○挨拶の習慣が定着している生徒が多いが、挨拶の声が小さい生徒が増えたように感じられる。 ○服装・頭髪の規則に関しては概ね守れており、指導にも殆どの生徒が応じている。ただ、年間を通して女子生徒の短いスカート丈やネクタイ未着用が目立った。 ○SNSのトラブルは殆どなかったが、校内でのスマートフォン使用違反が54件あり、昨年度より倍増した。 ●アンケート「挨拶・服装等けじめのある学校生活ができた」肯定的回答97.7% ●アンケート「校内の清掃に勤しみ、ゴミの分別等もしっかりできた」肯定的回答90.8%	○挨拶の励行、服装・清掃指導等の徹底 ○生徒が主体となって取り組む学校環境の整備	○挨拶ができることが本校生徒の良さのひとつなので、職員全体がそれを認識して取り組む。 ○生徒が自主的に学校生活の決まりを守るよう、生徒会執行部の活動の一層の活発化と、生徒部、学年団と連携した働きかけを行う。	○挨拶の習慣が定着している生徒が多い。 ○頭髪・服装に関しては、ほとんどの生徒が規則を守れているが、女子のネクタイ未着用が目立った。 ○校内でのスマートフォン使用違反が36件あり昨年の同時期より8件増加した。 ○環境委員を通じて、ゴミの分別の徹底・減量化などの活動を継続して行っている。		○学校生活のきまりが守れるよう後期生徒会執行部の活動を通して生徒により一層働きかけるとともに、各教科・学年団・部活動と連携し細やかな指導を心がける。 ○境港警察署との連携事業を継続し、特に自転車運転時の交通安全についての啓発活動を充実させる。 ○今後も環境委員を通じて、ゴミの分別の徹底・減量化などの活動・呼びかけを継続して行っていく。

年 度 当 初				中間評価			
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
3 学力の向上と進路実現	○「進路目標を定め、その実現に向けて家庭学習を進めた」と回答する生徒の割合が8割を超えること。 ○国公立大学現役進学者数が30名を超えること。	○担任の個人面談や学期ごとの保護者懇談会等を通じて、また進路部との連携を通じて、生徒自身や保護者に進路意識を持ってもらうよう働きかけた。また、学年集会においては、現状に満足するのではなく、少しでも上の目標を持って努力するよう働きかけたが、まだまだ授業や学習への意欲・意識は高くない。 ○放課後に自主的に居残り勉強をする生徒や、みなとテラスを利用する生徒が増加した。 ○特進クラスの生徒は、忍耐強く学習に取り組んでいる。 ○目標が明確な生徒や学習の習慣がある生徒は、我慢強く勉強することができている。 ○2年次の「境考学」を契機に、主体的な活動を3年次に行い、進路実現に繋げた生徒もいた。 ○「話してみよう韓国語」において全国大会への出場をはたした。 ●アンケート「進路目標を定め、その実現に向けて学習を進めることができた」肯定的回答83.3%	○生徒が3年間をとおして進路目標を持ち、その実現に向けて努力する姿の確立 ○キャリア教育全体計画に基づいた明確な進路目標の設定	○進路実現のために、自分に不足していること(知識・能力)をまず自覚させて、具体的にどんな力を身につけるべきか、そのためにどんな学習に取り組むべきかといった、実践に繋がる指導を心がけたい。 ○家庭学習の定着が不可欠であり、指導する者がいなくても、自主的に学習に取り組む姿勢を育てていくことに努める。 ○学力を伸ばそうとする取り組みを早い段階から行わせることが大切であり、大学を研究する時間等を前倒しにする必要がある。加えて保護者向けにもセミナーを開催する。 ○基本的学習と過去問・入試問題を取り扱う場面を必要に応じて分けて扱うことにより、受験に対する意識を高めるようにする。 ○学校全体でタブレット端末を常用した授業を行うことができるような環境整備が必要である。 ○ICT活用についての情報を積極的に収集し、活用の幅を拡大していく。	○勉強と部活動の両立が課題である。 ○自学自習の姿勢が身につけていない生徒が多い。 ○みなとテラスの自習スペースを積極的に利用する生徒が増えた。 ○家庭学習の習慣化は定着しておらず進路意識の高い生徒が少ない状況である。 ○DARナビは大学進学生徒の意欲を高める効果がある。1年次生には大学とはどんなものか知り、2年次生では自らオープンキャンパスへ参加する生徒が増えている。	B	○授業を中心とした学習指導を継続していく。自学の習慣を身につけさせ、家庭学習を定着させる。また、テスト前にも集中して取り組むよう指導を続ける。 ○安易に進路決定せず、より高い目標を掲げて努力するよう指導する。 ○生徒の状況や情報を共有しながら各教科・学年団や部活動などと連携して、細やかな学習指導および進路指導を心がける。 ○機会を捉えて、進路に関する情報提供や、情報収集の大切さを今後も伝えていく。
	○「授業の内容に興味をわき、理解が深まった」と回答する生徒の割合が8割を超えること。 ○タブレット端末等のICTを活用した生徒主体の授業を8割以上の教員が実践すること。	○基礎学力が不足している生徒が目立つ。落ち着いて授業に取り組む雰囲気確立することと、家庭学習の定着が必要である。 ○教科書付属の動画、スタディサプリ等を用いて、生徒個々の活動ができ、理解を深めることができた。 ○冬休みの課題をクロームブックを使い提出させた。予想以上に使いこなせる生徒もあったが、授業での利用は限定的であった。 ○多数の端末でのインターネット利用が不可能な現状では学校全体でタブレット端末を常用した授業を行うのは難しい。 ●アンケート「授業に前向きに取り組む、理解を深めることができた」肯定的回答92.8%	○1人1台端末を用いた授業研究会並びに授業参観週間での各教科代表による公開授業の定着	○各種の実習では、生徒が自発的に工夫し活動することで、良い体験になっている。 ○様々な教科がクラスルームを活用している。 ○授業や課題の提出等でICTの活用を行った。	○引き続きICTの活用に努める。		
4 学校業務改善の取組	○行事や委員会等を抜本的に見直す。 ○長時間勤務者の解消	○担任と副担任を中心に連携したクラス経営ができている。学年全体で円滑な協力関係ができている。 ○欠席連絡にGoogleformsを取り入れ、保護者の負担、電話対応の負担は軽減した。学事への欠席登録方法については今後改善の余地がある。 ○採点に百問繚乱を取り入れる教科が増加し、週明けテストにも活用している。一方で導入時に比べ起動や動作に時間がかかるが増えているので、早急に対処する必要がある。 ○学事システムの活用で業務軽減にはなっているが、日々入力登録においてミスが起きやすい。 ○推薦・総合型選抜対策の個別指導が、2学期の教員の負担を増やしている。 ●職員アンケート「業務を効率化し、時間外業務の削減に取り組めた」肯定的回答71.4%	○時間外業務の上限が、月45時間、年360時間を超えないよう遵守 ○休養日、活動時間を設定した活動方針の全部活動への徹底	○業務を効率化し、時間外労働を減らすには、まず学校の業務の精選が必要である。 ○Googleformsからの欠席連絡の学事登録は、情報担当・担任の先生と連携を取りながらより良い方法を提示できないか検討する。 ○鳥取県運動(文化)部活動の在り方に関する方針の遵守をする。	○Googleworkspaceのサービスを用いて業務の効率化を図っている。 ○小さなことでも、学年団や担任会で情報を共有して、チームで問題解決に当たることを心掛けている。 ○生徒や保護者への対応などきめ細かい連絡や対応を行うとどうしても業務が多忙化し時間外業務が増加する。 ○Googleformsの活用が増加した。今年度は試験的にGoogleformsを用いた科目登録を行う予定である。	B	○学年間、分掌間の連絡をこれまで通り密にして情報共有を心掛ける。 ○全員で協力、分担して業務を進める。

評価基準 A:十分達成 B:概ね達成 C:変化の兆し D:まだ不十分 E:目標・方策の見直し
[100%] [80%程度] [60%程度] [40%程度] [30%以下]